

平成 30 年 2 月 24 日（土）

信州ブランディング・フォーラム in 飯田

「飯田らしさ、信州らしさを見つめなおしてみよう」

会場 下久堅公民館

トークセッション参加者

太田農園経営 太田 いく子 さん

飯田 OIDE 長姫高等学校教諭 国松 秋穂 さん

飯田市副市長 佐藤 健 さん

長野県松川高等学校 3 学年 田代 直己 さん

株式会社太陽農業 殿倉 由起子 さん

コーディネーター

長野県教育委員会 文化財・生涯学習課 企画幹 木下 巨一

全体構成

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

司会

これから「信州ブランディング・フォーラム in 飯田」を開会させていただきます。

始めに本日のパネラーの皆様をご紹介します。株式会社太陽農場、殿倉由起子さんです。お二人目、松川高等学校 3 年生の田代直己さんです。続きまして、飯田 OIDE 長姫高等学校教諭、国松秋穂さんです。続きまして、太田農園経営、太田いく子さんです。五人目でございます。飯田市副市長、佐藤健さんです。続きまして、本日のコーディネーターをご紹介します。長野県教育委員会文化財・生涯学習課企画幹の木下巨一でございます。最後に、本フォーラムの総括監修者でございます、長野県参与、船木成記でございます。

それでは皆様、どうぞ最後までお楽しみくださいませ。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

よろしくお願いたします。今年度の 4 月から、私がブランディング担当、県の参与ということで、皆さんとご一緒になるようなご縁をいただきました。本業の方は博報堂という会社でマーケティングをやっているんですけども、内閣府に 2 年間、それから尼崎市というところの、市の顧問を 5 年間、それで今年から長野県の参与ということで、この 1 年間は、総合計画というのを県が今年度策定をしてみました。今、パブコメが終わっ

で議会でということ議論がされているところなんですけれども、プランとしてはですね、「しあわせ信州創造プラン 2.0」というカタチで作られています。サブタイトルがですね、「学びと自治の力で拓く新時代」という言い方であります。学び、これはもう飯田の専売特許のようなことでありまして、おそらく社会教育とか公民館の活動という日々日常の中の学び、そういうものがあふれているような地域で、どういうふうな日常をすごされているのか。そんなようなことを、皆さんと一緒に長野の大切なもの、それから飯田が大切にしているものを皆さんと共有させていただきながら、日本全国に胸を張って伝えていけるような長野県であるように、そんなようなことを思いながらこのブランディング・フォーラムを開催させていただきます。

長野県文化財・生涯学習課企画幹 木下 巨一

皆さんこんにちは。今年の4月から、長野県の教育委員会の文化財・生涯学習課というところで、企画幹という職務を与えられまして、仕事をしております。仕事は、言うなれば、長野県内の社会教育とか地域づくりの現場が今よりもっと元気になるようなお手伝いという役割で県内を歩かせていただいております。今年の3月までは37年間飯田市役所に勤めておりました、今、61になりました。今度の4月で62になりますので、立派にシニア世代に突入したんですけれども、定年退職してから長野県の方の仕事をしておるとい、そういう人間です。

たまたま今日5人の皆さんを、どなたも知つとるとい行き掛かりがあつて、私の方から皆さんをご紹介しながら、5人の皆さんが主役になって今日は話を進めていきたいと思うので、よろしくお願ひ致します。

それではさつそく始めてまいりたいと思ひます。一番最初に殿倉由起子さんからお話をいただきます。

株式会社太陽農業 殿倉 由起子 さん

皆さんこんにちは。野菜ソムリエとポム・ド・リエゾンの資格を併せ持つ、農業女子、ゆっきーこと殿倉由起子です。よろしくお願ひします。今日、この5人呼んでいただいた中で、一番この会場に近い、下久堅出身の殿倉です。私は株式会社太陽農場といつて、父が経営している、法人といつか農業・農家で働いていて、ちょうど東日本大震災が終わつた後からUターンをして帰つてきたので、もうすぐ丸7年経つかなつていところなんです。農業を取り巻くいろんな活動をやっているの、その紹介をさせていただきたいと思ひます。

私は34歳になります。高校卒業してからイギリスに留学をしました。もともと専業農家で育つてきたんですけど、うちは主にブナシメジを栽培しています。ブナシメジを年間105万から110万本くらい出荷しているのと、りんごとアスパラを今出荷しているところなんです。もともと農業のことは大っ嫌ひでした。両親がずっと、夏暑い時も、冬寒い時も、外に出

て、休みもなかなかなくて。一番はやっぱり自分もすごく、お手伝いさせられたというか。お小遣いとかもらってる人とかもいると思うんですけど、うちは無償で手伝いをさせられて、夏休みとか長期の休みになると、ほんとに働き手の一人に思われてすごい仕事を手伝わされていたので、ほんとそれが嫌で嫌で仕方が無かったというのがきっかけで、絶対に高校卒業したら出るんだということしか考えてなかったんですね。中学の時にたまたまホームステイをイギリスでしたことがきっかけで、高校を卒業してからイギリスに留学をしました。5年間留学をしていたんですけども、大学の2年目にインターンシップをホテルでしていて、卒業してから1年、インターンシップをしていたところで働いてから日本に帰国しました。帰国してからは東京にある外資系のホテルで3年ぐらい働いて、ちょうどその時に結婚をしたんですけども、旦那さんが田舎暮らしをしたいっていうことがあって、だったらうち田舎だからということで、飯田にUターンをして、農業を始めたきっかけです。

ずっと太陽農場で働いているんですけども、やっぱりただ働くだけでは農業って面白くないなって感じていたので、野菜ソムリエの資格というものにその時出合って、それから「野菜ソムリエプロ」という資格を取得しました。

「ポム・ド・リエゾン」ってあるんですけども、「ポム」というのが「りんご」という意味で、「リエゾン」というのが「つなぐ人」という意味で、りんごとりんごで作ったお酒、シードルの普及活動ということも行っています。それから昨年からなんですけれども、長野県の農業青年クラブである、「PAL ネットながの」という団体で会長をしています。イギリスでは大学で観光学を学んで、スコットランドのエディンバラでホテルのインターンをしました。ほんとに街中がすごくきれいな場所で、世界遺産の中に住んでいるという感覚で生活をしていたので、イギリスの生活は楽しかったです。

イギリスって、本当に食事が不味い、世界一食事が不味い、ということですからすごく有名な国であるって皆さんご存知かもしれませんが。その時に私ほんとうに、日本で食べている食事はすごく美味しいな。特に私が飯田で、実家で食べていたお野菜ですとか、果物ですとか、お母さんが作ってきた料理というのが、ほんとに美味しいものだったんだなって、この時に初めて気付きました。イギリス人は野菜料理を食べるっていうことがあんまりなかったんで、ほんとに野菜が恋しくなったりですとか、日本にある大きなりんご、自分の家で食べるような大きなりんごってのがほんとになかったんで、すごい小さいのを食べたりとか、ほんとに日本の食材ってのは美味しいんだってことに気付きました。

Uターンしてきて7年目なんですけど、始めの1、2年はすごくきつかったんですよ。想像していた通りに、外は暑い。夏は暑くて、帰ってきたのが夏だったので、ずーっと外でりんごの、紐を使って枝を引っ張るっていう、誘引作業というのをしていたんですけども。手間もかかるし、まだ作業の内容もよくわかってないところで、ほんとにずーっとそれを1ヵ月以上、2ヶ月ぐらい誘引作業をやっている。ほんとにこういうのをやる人ではないなって自分で勝手に思っていて。だったら野菜ソムリエの資格をもっと活かそうって、

その活動をいっぱいしていました。今は2人で「YUISAI」というチームを組んで、地元の野菜を皆さんに楽しんでもらう会ですとか、中日新聞でコラムを1カ月2回書かしていただいていたとか。「やさいwave」という、地元の野菜を地元の方に楽しんでいただく、地元で頑張る生産者を紹介するという会を、2ヶ月に1回行っていたりですとか。後、地域の野菜ソムリエさんの会で代表を行っていたり、などの活動をしています。野菜ソムリエの活動は私にとってはすごく大事なきっかけになりました。ていうのはこのきっかけで、ほんとに、たくさんの方に出会えたこと。出会ったことによって、やっぱり自分も頑張らなきゃいけないな、ってことに気付かされた。自分が持っているこの野菜ソムリエの活動も大事だけれども、この野菜を作っている人がいなければ自分のやっている活動もできないんだなってことに気付かされて、すごく良かったと思います。今「農業女子プロジェクト」といって、女性農業者をもっと知ってもらおうというような活動に入っていたりですとか。国際シンポジウムに参加させていただきまして、安倍首相ですとか、G7 国際会議に呼んでもらったり。今長野県の中でも農業女子の活動がすごく広がっています。

さっきもちょっと紹介したんですけれども、「PAL ネットながの」長野県農業青年クラブの会長を行っています。現在141名の長野県内の農業青年者が所属している会です。すごく若い人たちの団体で、20代前半から30代後半まで、だいたい40歳ぐらいまでの若手農業青年者が所属していて、南から北まで、様々な地区の方々が入ってます。

PAL ネットながのは、長野県の農業青年のリーダーとなるような農業青年者を育てるっていうことで、いろんな研修会を行ったりですとか、県大会を運営したりしてます。

野辺山の農業法人の社長はまだ30歳なんですけれども、社員の数が80名、ハウスをほうれんそうだけで250棟たてていたりとか。お父さんが亡くなってしまって社長になったんですけれども、すごいやる気があります。

松川村でりんごを作っている男性は、ほんとに自分はりんご王子だと、世界一りんごをかじるのがうまい、りんごをかじるのが美味しそうにできる男子になりたいといっています。

Iターンで横浜から家族で移住してきて、今、お米とかぼちやを作っている男性は、保育園で食育活動をしています。ほんとに彼も、すごく個性的な人なんですけれども、PAL ネットながのはそれぞれの個性をすごく大事にする団体です。それぞれの個性を、農業を舞台にして外に発信していきたいと思っています。

大町でりんごを作っている彼は、畑の中でお客さんが来る直売所兼バーを自分でDIYで作ったんですね。もともとある小屋を改装して自分で家具とか作って。彼もサイダー、シードルを仲間で作って販売をしているそうです。

皆で持ち寄った食材を鍋にして食べているんですけれども、すごいたくさん食材があるんです。長野県のだけでなく、全国の農家の仲間の食材を持ち寄って、このような会を開いたりしています。PAL ネットながのに入ったことで、全国の若手農業者との出会いがほんとに増えました。長野県だけでなく、長野県にこんなにたくさんいい人たちがいるんだよ、頑張ってるんだよ、っていうのを全国に広めるとともに、逆に全国から精気をも

らうっていう場になっているんじゃないかなと思います。

そして今私が力を入れているシードルですね。販売は行っていませんけれども、仲間と一緒にイベントを行ったりして、まずたくさんの方々に長野県のシードルのこと、りんごのことを知ってもらうということで、見てもらうとわかると思うんですけど、可愛くないですか。とにかく私たちは可愛さで勝負するというので、今、活動をしています。

長野県松川高等学校3学年 田代 直己 さん

皆さんこんにちは。この中で一番若造なんですけど。長野県の飯田市、座光寺の大堤というところに住んでいます。松川高等学校3年の田代直己です。よろしくお願いします。私は家族の中唯一、生まれてからずっと長野県飯田市に住んで、過ごしてきたっていうような18年間でした。特に中学校3年生までは飯田市のみでの生活っていうことで、小学校中学校は地元の学校に通っていました。通ってはいたんですけど、正直あんまり飯田市の町の中、特に銀座の方とか何通りとかああいうとこがぐちゃぐちゃすぎてわからなくて、それこそほんとにJR飯田線とかもあんまり乗ったことないような人でした。

中学校を卒業して松川町の松川高校へ進学しました。その時に初めて電車通学というものをして、住んでるところは飯田で、毎朝電車に乗って松川へ行って学校生活をして来っていうような3年間を送りました。松川高校ではボランティア部というところに所属していて、東日本大震災への支援活動であったり、地元の飯田市の方へのイベントのボランティア活動などもして。また生徒会で去年会長をしていました。

一応地元の関わりということで、座光寺小学校というところにいたんですけど、その近くに「麻績の里の舞台桜」という珍しい桜があって、花びらが不規則に咲いていて、普通5枚なんですけど、8枚があったりとか、12枚とか16枚とか凄くたくさん咲く珍しい桜のガイドをするボランティアを小学校3年生から6年間ぐらいやっていました。そして中学校2～3年生の時に「いい大人形劇フェスタ」のボランティアスタッフなどもしていたんですけど、正直飯田市について、何があるのかとか言われると、何も言えないような状況で過ごしていました。

高校に進学してから、飯田市の事業である「カンボジア スタディツアー」に1年生のときに参加をしました。この活動で木下さんであったり飯田市の公民館の方と知り合いになりまして、色々こういうような活動にも呼んでいただけるようになって、生まれて初めて海外に、自分でパスポート取って行くっていうような活動をしました。3月ぐらいに行ったんですけど、その時佐藤副市長も一緒に行っていたんですけど、凄く暑くて、湿度はないんですが40度近く日中があったりして、現地の人も昼寝をしたりとかするぐらいの中で、一週間、結構強行スケジュールで。この活動がかなり刺激になって、色んなものを見て来たりし、カンボジアで活躍している日本人の姿なども見て来たりして。直接何か影響を受けたというよりも、何かいろんな国のこととか自分の身の回りのことに目を向けるきっかけになった研修だったかなというふうに思います。このカンボジアスタディツアー

一に参加したことが、特に地元の飯田市について考えるきっかけになったというようなところ。現地の人とかに長野県飯田市のことについて紹介するっていった時に、さっきも言ったんですけどなかなか話せないということがあったり、カンボジアスタディツアーでなくても、普段松川高校ではむしろ飯田市から来てる人は凄く少なくて、高森町から通っていたりとか、駒ヶ根だったり北の方から通っている人が結構多いんですけど、その人たちに飯田ってどんなところかって説明しろって言われても、何か言えないような。何かあるかって言われても、うーんって止まってしまう、ということがあったように感じていました。カンボジアスタディツアーの事前学習として、カンボジアや飯田市についてのことをたくさん学んだんですが、どんどん勉強しているのももちろん当たり前ですけど、カンボジアについての知識がどんどん増えていくんですけども、飯田市について知らないことがあまりにも多すぎるということに気がきます。例えば名所、観光スポットであったり、歴史というようなところであったり、食文化だったりとかっていうようなことに関して、全然自分は無知だなあということを知りました。松川高校に入学してからボランティア部に所属したり、また生徒会活動も行うっていうことで、特に松川町で活動をするようなことが多かった。結構似ていて、今日農家さんがお二人いらっしゃるんですが、その農家さんにご協力いただいて、松川のりんごを東北への支援としてお手伝いに行く代わりにご寄付いただいて持っていくってような活動もしてたんですが、すごくこう松川町のことにどんどん詳しくなっていくけど、飯田市のこと全然知らないみたいな感じで。それに関してちょっとやっぱり、違和感がありました。カンボジアについて半年間学んだことや、松川高校での3年間と、自分が生まれてからの18年間のことに関して逆転してしまって、カンボジアであったり松川町の裏道とかもどんどん知るようになってきたんですけど、飯田の道は全然知らないなあって。もっと飯田市のことを知って見たら友達とかと遊びに行く時とかもこういうところあるんだよとか、言えるとちょっとかっこいいんじゃないとか、モテるんじゃないかと思って。自分のおばあちゃんとか父も、離れてる期間もあったんですが、ずっと飯田の人だったので、昔の町のこととかを聞いたりすることによって色々なことを知るようになりました。これが飯田市を離れる機会が多かったからこそ、そういうことに気付けたのかなあというふうに思います。カンボジアに関してもそうですし松川での3年間もそうですが、ずっと同じところにいると近すぎて見えなかったのかなと。

個人的に感じたところで、名所っていったらやっぱり飯田駅前のお店、最近すごくおしゃれなお店がどんどん増えてきて、ちょっと友達と行けるようなところを探したりとか。歴史というところでは、飯田市っていうふうに考えるとすごく大きくなってしまっているので、自分がいる大堤とか、すごいほんとに狭い範囲から考えてみるとか聞いてみると、なんか凄く面白いところだなあと思って。うちの周りが凄く古墳が、昔なんか凄く遺跡があったみたいで、矢じりとかが結構出てくるんですけど、そういう面白いところもあるなあとか気付いたり。

文化だったりすれば、イベントだったり、食文化だったり、水引だだりの工芸品を探ったりとかすることによって、実は凄く厚みのある町だなあっていうことに気付きました。飯田ビギナーだったんですけど、飯田ネイティブなのに飯田ビギナーみたいな、生まれ育ったのに飯田のこと知らなかったというところから知るようになることができたっていうことは、色々なものを見たりとか、おうちの人に話を聞いたりすることであったり、また考えるということ、良い面だけを考えるっていうことじゃなくて、課題が残っていたりですとか、自分の住んでいる地区もすごく小学生が少なくなっていたりして、そういう中で魅力って何なのかなということをもまずは内側、自分の身の回りの近くの人から伝えていくことを充実させて、そこから県外だったりとか、県内の友達とかが大学で進学したりとか、できたらそういうの伝えていって、飯田を良い町にできたら、支える側の方に回れたらなというふうに思っています。

飯田 OIDE 長姫高等学校教諭 国松 秋穂 さん

飯田 OIDE 長姫高校の国松秋穂と申します。よろしくお願いいいたします。田代くんが、うちの学校でやっている「地域人教育」の、ほぼ同じようなことを、全部しっかり高校生が話してくれました。

私、ちょっとイントネーションがおかしいのをお気づきかと思いますが、飯田出身の人間ではなくて、滋賀県の栗東市というところ、JRA のトレーニングセンターがあるところで、競馬好きの方は栗東っていえばあそこやなあっていうところを、お気づきのところだと思いますが、あそこで生まれて 18 までおりました。男ばかりの 5 人兄弟の 2 番目です。滋賀県にしながら、長野県には凄く幼少の頃から来てまして、山登りやスキーなんかで、だいぶ自分の親が好きなので、私はそれに感化されまして、長野県が大好きになって、大学をこっちにしちやいました。

当時は上田市にいたんですけども、そこでアルペンスキーにはまりまして、年の半分ぐらいは山の上にいるような、そんな生活をしていて、その中でスキーの少年団の指導に関わる中で、こういう道もいいなあってことで教員免許も取りながら、すぐに教員になれば良かったんですけども、東京の方でシステムエンジニアに一旦なりまして、22 歳からやってたんですけども、そのシステムエンジニアをする傍ら週末は、新幹線がありましたので、長野県に来て、社会人のアルペンスキーのチームに入って、社会人になっても週末は長野にいるような、そんな生活をしていたんです。

26 歳の時に転機がありまして、私の家では家業をしているんですけども、父親が自分の家業をほっぽってですね、やりたいことあるから、ちょっと地域のことに関わりたいから、ていうことでいきなり家業をぼんと辞めてしまうんですね。そのへんで手伝うこともあったんですけども、その親の姿を見ていて、なんやこの親はと。自分を育ててくれた親ですけども、自分の家業をほっぽってそんなことするのかって最初思ったんですけども、だんだんその親を見てみると、やりたいことやってる親かっこええなっていうふう

に思って、その時に自分を省みて、やりたいことは何だろうという時に、長野県に来たいというふうに思ったんですね。たまたま僕が大学生の時に長野オリンピックがやってたのでだいたい見に行ったりもして。それにも影響されたんですけども、やっぱり第二の故郷で、少年団に関わって自分のことをすごく認めていただいたような場所の、あったかみのある場所に帰って来て、学校の教員として働きたいというふうに思って、27歳の時に長野県に帰って来ました。帰って来て良かったなあというふうに思います。本当に。東京での生活と、こっちに戻って来てからの生活っていうのは、もう間違って言うていいほどの、本当に豊かな時間を過ごせたりとか。あとは高校の先生というものがですね、言うてみたら人間関係でお金をいただくようなところが非常に多いかなあと思っていて、その子供たちと対峙するような時間っていうものがかけがえのないものだったというふうに思って、小諸に27で行きまして、29歳で諏訪市に転勤しまして、今現在飯田市に来てここで5年目になりますけれども、その飯田市に来て出会った「飯田OIDE長姫高校」に赴任をして、「地域人教育」っていうものに携わるようになりました。

田代くんが言うてくれた、地域を見ること、そして地域について考えること、とかそしてそれを伝えることっていうものを、どういうふうにすればいいかなあってことをやるのがうちのやっていると、町中が教室ってさっきあの、天竜川のところにあった写真があるんですけども、これは松尾の、天竜舟下りのあの場所で撮らしていただいて。社長の曾根原さんと仲良くさせていただいてるので、学校から机と椅子をですね、マイクロバスで運んで、生徒と一緒に撮ったんですけども。これ本校でやっている地域人教育をイメージする写真で、思いつきで撮ったのではなくて、飯田の株式会社週休いつかの新海さんがキャッチコピーを考えてくださいます、結構やりとりかかったんです。3カ月ぐらい延々やりとりしながら、地域人教育ってこういうことじゃないのってことで、「町中が教室」っていうキャッチフレーズで、それをわかりやすくするために町中に机と椅子を持ち込んで、写真を撮って。田代くんが考えてくれてることも、こういうことなんじゃないかなあということで、教室外も教室にしまえっていうようなことを表している、むしろそこに学びがあるんじゃないかっていうことをやらしてもらっています。

じゃあそんな地域人教育ですけども、うちの学校だけではなくてそれこそ、木下さんが一番最初に関わってくれた話ですが、今年で約6年になりますが、飯田市さんと松本大学さんと、当時の飯田長姫高校で始めました。先ほど田代くんのボランティア部だったりカンボジアスタディツアーっていうのは自分から手を挙げる方式ですが、うちの学校の場合は商業科の全員が授業で地域に出るといったことをやらしていただいています。

その時の学びを深める要素が4つほどあります。飯田市公民館の小島主事がまとめてくれたことでもあるんですけども、4つあるうちの1つ目が「素敵な生き方をしている人」。カッコいい大人っていうことを表現したりしますが、この飯田の中にいるカッコいい大人、素敵な大人と一緒に、高校生を出会わずということをやらせていただいています。

そして「一緒にやる仲間」。これ1人でなかなかね、高校生放り出すのも難しいので、友

達と一緒に、仲間と一緒に時には学年を超えて行きます。

3つ目に「必要とされる自己有用感」。あなたがいてくれて良かったってのが普通の自己有用感ですけども、頼りにされるっていうのは、私自身も、上田の少年団の時の経験ってのはほんとに自己有用感ではないかなと思ってるんですけども、親と学校とではなかなか経験できない、地域に、そして人に必要とされてるといふそういう感覚を持てること。そして4つ目として「考えを整理して伝える機会」。ていうのを、先ほどまさに伝えるってのありましたけれども、表現するということ。自ら考え、行動し、そして伝えるっていうことを学習目標としていますが、その使い方というのはこういう、今みたいな言葉で伝えるってこと以外にも、文章だとか、そういったことでも伝えるということが大事なんじゃないかなということも重要として捉えていて、これを大事に学校としては授業を進めています。

学年に応じて地域に出る機会を増やしていくっていうようなことをしています。3年生の最後には、地域の方を招いて。だんだん入場して来られる地域の方が非常に増えてきてまして。今年ありがたいことに東の地区の地域住民の方がたくさんみえられて、うちの高校生の子たちを見て、うちの子がって言うんですよね。うちの子がって言って非常にうれしい言葉で、その地域の方が高校生を応援してくれる、そして高校生がそれに対して一生懸命恩返しをしながら学ぼうとしているような姿が見られることができました。

だんだん学びが進化していくと、地域の中だけっていうよりかは、その学びが県外、もしくは首都圏とか例えば大使館とか書いてますけれども、そういったところにも伸びています。自ら考える力、行動する力、表現する力、そういうものを鍛えていくと。従来型の学校教育だけではこういう力を伸ばすことをなかなか難しいのかなと思いつつ、「地域人教育」ってものの中でこれを大事に進めています。

最近になっては、「スタディエッグ」っていう主体的な集団ができています。様々な生徒自身のやりたいという活動でできています。例えば空き家ですね。空き家について問題意識を持った高校生たちが、この空き家を何とかしたいということで、高森にある株式会社エース・リフォームって会社さんと、株式会社週休いつかの新海さんに協力いただいた上で、これをシェアハウスとして再生して運用しています。

様々な活動をしている中で、学校としては、こういった地域人教育をなんでやってるのかってものをちゃんと整理しなきゃいけない。学校だけではなかなかこう地域に出るっていうことに対して、受け皿の問題もありますので、やっぱり飯田の強みってものに学校も気付くことになります。地域住民の公民館活動の充実っていうものを、我々は凄く恩恵を受けながら、そしてそれが高校生が主体的に学習活動をする土壌になってるんじゃないかなあと思っています。飯田市にある学校としては、そこを最大限、一緒にやる活動しながら、ただ地域に出れば良いというようなことではなくて、学習するコミュニティってさっきちょっと言ったんですけども、そういった飯田の公民館活動のような、住民の方が主体的に活動しているところとかの団体とかと一緒にやっていく、そういう大人と関わっ

ていってことが大前提ではないかなあというふうに思っています。

太田農園経営 太田 いく子 さん

皆さんこんにちは。千代の太田いく子と申します。私は今農業をやっておりますが、3人姉妹の長女として生まれました。小さい頃から父親に、お前は長女だから、下伊那農業高等学校を出て、農業を継いで、しかも養子を貰って、やっていってくれよとずーっと言われ続けてきましたが、中学3年の進路決定の時に、先生の一言でころんと変えてしまいました。そして長姫高校に進み、多摩川精機に就職し、ぴっかぴかのOL生活を送っていましたが、ある時母親に、体調が崩れたから会社を辞めて家に入ってくれんかということで、家に入って農業をすることになりました。けれども、その時、はたと気が付いたのはですね、下伊那農業高等学校出てねえじゃん、何にも知らねえ。当時牛を飼っておりました。牛のことも知らない、果樹をやっていたけど果樹のことも知らない、野菜づくりも知らない何も知らない私でしたけれども、母に教わりながらまた、果樹は果樹の仲間、それから酪農は酪農の仲間に入れていただいて。農業を始めて40年弱になりますが、この歳になって、やっと1人前になれたかなれんかわかりませんが、一人でできるようになったかなあというふうに思っています。これも全て地域の皆さんのおかげだなあというふうに思います。

今から20年ほど前になりますけれども、飯田市の千代というところはですね、大変飯田市の市街地から離れておりますが、ここに副市長さんいらっしゃるんですけども、インフラの整備が一番遅れております。すいません。市の悪口を言うために来たわけじゃないんですけども、水道は通ってない、もちろん下水もだめ。しかも、千代は竜東の中で一番の中山間地の最たるところでありまして、高齢化率が飯田市の中でもトップ3になってしまいました。一番多かった時の人口が4,500人位でしたけれども、20年前は2,000人ちょっとになりました。このままほっとくと千代がだめになってしまう、そんな思いから地域の人たちが集まり話をしましたが、ちょうどその頃、世の中にはグリーンツーリズムという言葉が飛び交っておりました。何も知らない私たちはですね、県の農業改良普及センターの先生をお招きして、グリーンツーリズムを学びました。それで教えていただいたことが、都会の人と農村の人の交流。しかも滞在型農業。千代だとか、飯田に来ていただいて農業をすることによってその人たちとのふれあいをしようじゃないか。そういうことらしいなあというふうにぼんやり理解ができました。そんな中でたまたま飯田市役所の商業観光課の担当者の方から教育旅行の話が舞い込んできました。できるかどうかわかりませんでしたけども、さんざんさんざん悩んだ結果、受けることにしました。本当なら、ええ大変だったのに、今思えばね、10件や20件の農家集めるのは簡単ですけども、当時何も経験のない私たちが、他人を我が家に泊めて、しかも農業体験をしてもらうなんていうことは、もう思いもつきませんし、どんなことかも想像もつきませんでしたけれども、何とか皆で説得し、真っ先にやらないかって言ったのが、なぜか太田いく子さんらしいんです

けれども、本人はすっかり忘れていましたが、そんなわけで、とにかくやってみましょうということで始めました。

千葉県のある学校の生徒さん 120 名を、受け入れることになりましたけれども、実のところ千代だけでは受け入れができません。上郷のお隣の、蛇沼という地域の方たちと一緒に、受けたのが始まりでございます。これが平成 10 年のことでした。

当時は初めてのことでしたので、メディアも注目しましたし、大騒ぎになりました。私のところには千葉県の女の子たちが来てくれまして、向こうの子どもたちも初めてなものですから緊張しまくりの体験でした。

当時酪農をやっておりました。ある時、愛知県の中学 1 年生の坊やたちを受け入れました。この中に、とてもとても突っ張った坊やがいるんです。私のうちに来てくれまして、真っ先、牛小屋に案内した時に、ある坊やが、なかなか入ってこないんですよ。しかも鼻つまんだんだ。私ね、こんちくしょうと思いましたね。私酪農で食っとる。それなのに鼻つまんだ。ですから、嫌だったら帰っていいよってはっきり言いました。でも彼らですね、もう農家に預けられてしまったもんで、帰るわけにいきませんでしょう。仕方なく、遠巻きに、牛を見ておりました。そんな中で私はね、嫌な顔する子ほど真っ先に名前を呼んでね、やらせるんです。その子を呼んで、餌をやるぞ、それから堆肥を取るぞって言いながらやっておりましたが、たまたま運良く、お産が始まったんですよ。これ良いチャンスだなあと考えてですね、いつもなら私が、手を入れて、どのあたりに顔があるか、足があるかって調べて、産ませるんですけれども、ちょうど良いタイミングだと思って、その坊やたちにね、牛の足を引っ張ってもらいました。本来なら足が出てきて顔が出てきて生まれてきます。たまたまその時は順調だったものですから、様子を見て、子どもたちにやっていただきましたけども、ほんとにね、素手で、あのぬるぬるした足をつかんで、母親のいきみと同時に、ぐっと引っ張って、産ませてくれました。子どもたちが生まれたばかりの子牛をきれいにタオルでふき、初めて搾った乳を口に含ませて、手入れしてくれます。ところがこれだけじゃねえんだ。30 分ぐらい経つとですね、牛はね後ろ足をふるわせながら一生懸命立とうとします。そんな中でね、あの子どもたちがですよ、牛に向かって、「頑張れー！」って声出したんですよ。私ねその時、鳥肌が立ちました。あんなに突っ張ってね、わかりますかねあの一番奥におる坊やですよあれ。ちょっと剃りこんでた。その坊やたちがねえ、牛に対して頑張れだに。おめえの方が頑張れだと思ったんですけど。でもほんとに嬉しかったです。そして、子どもたちが帰るときに、いつものように閉村式をしてお別れするんですけれども、その前に、校長先生に少しばかり耳打ちをしましたが、家にきた子どもは実はこういう経験をしましたと。ほんのちょっと言っただけなんですけど、帰りの際、校長先生のお話の中で、太田さんの家に泊まったこのだれそれ君はって、この一番しょうがない子どもの名前を呼んでね、こんな良い経験をしたって話してくださったんです、子どもの前で。そしたら、その坊やがですね、ぱっと後ろ振り返って私の顔見て、にこっと笑ったんですよ。いやいやほんとに初めてうちに来て、笑ってくれました。私は

あの時の笑顔は今も忘れておりません。ほんとに素敵な時間だったなあというふうに思います。どんなに突っ張っていても、どんなにいきがっていてもですね、農家に放り込まれた、3人4人の子どもたちは、そこのお父さんお母さんの言うことを聞きながら、一日一緒に暮らすわけです。その中で、ととてもとても大切な、中身の濃い時間を、過ごすことがこの子たちはできた。それだけでもたぶん幸せだったんじゃないかなあというふうに思います。来る子どもたち、来る方たちがですね、千代に来て見るもの触るもの、全てのことに感動します。その感動しとる姿を見て私が感動しています。そして、来る方たちによって、千代の素晴らしさ、また飯田市の素晴らしさを改めて教えていただく、そんな日を毎日送っているような状態です。

その中でですね、修学旅行で来てくれた、女の子のグループの班長さんから葉書がきました。私のところに体験にきてから2年ほど経っておりましたけれども、その間、友達とも別れてしまい、今は保健室登校で、教室に入るのはなんか怖いらしくて、「いくちゃん、励ましのファックスください、手紙ください」なんて書いてあるんです。わかりますかね。こんな葉書が突然きたら皆どう思います。私もびっくりしましてね、すぐ電話しました。電話の先で彼女が出まして、「ああ、いくちゃん私のことを覚えていてくれたんですか」って言うもんでな、「覚えとるに決まっとる」って言いました。何故かという、彼女が体験を終えて家に帰ったあと、お母さんがですね、横浜の月餅っていうああいうお菓子を送ってくれたんだ。私も品物に弱いもんだからそういう送ってもらうと絶対忘れないんですよ。そんなこんなで、ほんとに覚えていたんです。ですから、「もしよかったらもう一度私の家においで」というふうに電話を切り、お手紙を書きましたら、ちょうど1週間後にですね、また返事がきたんです。「いくちゃんの声援を胸に頑張ります」ということで、書いてあります。その後ですね、ほんとに彼女とお母さんとおばあちゃんと3人で私の家に来てくれました。出会った時、びっくりしたのがですね、2年前に出会ったあの元気な姿がまるで面影ないんですよ。能面みたいな顔ですね。もうぺたーんとして。うつ病ということで、お医者様の薬をいただいて、学校行ったり行けなかったりというそんな状態だったようです。とにかく、よかったらおいでということで会いました。会ったけど話すこともありません。話しかけても、帰ってくる言葉が少ないんですよ。ですけども何とかして、元気を取り戻してもらおうと思ってな、高い入場料を払って今田のイチゴ狩りに連れてったりな。いちご狩りの関係者いたらごめんなさい。天竜川の舟下りに連れていったりということで、年に一度ずつ来てくれるようになり、今はおかげさまでですね、やっとな、やっとなアルバイトができるようになったと、今年の年賀状に書いてありました。

元気で健康な子どもたちは、どこでも暮らしていけますけれども、心を病んだ人たち、例えば不登校であったりうつ病になった方たちは、何とかしてこんな田舎でもいいから、元気を取り戻してもらうために、私は出会っております。積極的に出会っております。お医者様の抗鬱剤よりも、田舎のおじいちゃんおばあちゃんは恐ろしいほどの力があるっていうふうに、ちょっと自信過剰だかもしれませんが思っています。そんな話をしております

したら実は、うちの市長がですね、「いくちゃん、県外ばっかじゃねえぞ。飯田市の中にも、結構心病んだ人がおるぞ」という話を聞いたので、近頃はですね、地元の小学校・中学校の生徒さんとも出会い、とても元気になって、世の中に出て行った子どもさんたちも、大勢いらっしゃいます。

そんなわけで、人との出会いの中で、私は、色んなことを知ることができました。千代の良さ、飯田の良さ、人の良さ。そして私も、来てくれた人たちに、何としてもこれからもがんばってもらいたいなあという思いで、一生懸命、出会った限りは、全身全霊でお付き合いをしております。最近はですね、インバウンドっていうんでしょうか、海外から一来てくれます。一昨日もね、中国のご家族さんが来てくれました。とても感動して喜んでくれて、もうハグハグで帰っていきました。近頃は、飯田市も、飯田市内だけではありません。下伊那中で農家民泊が盛んになり、大勢の方たちがここに来てくださって、たくさんお金を落とすってくださるかなあというふうに思っております。そうは言っても私の結論を言いますけれども、農家民泊をして収入が少しあります。収入から経費を引いて、残りは何だと思えます。感動でございます。収入－経費＝感動です。この感動が残ったもので、20年も続けてこれたかなあというふうに思っております。

長野県文化財・生涯学習課企画幹 木下巨一

先ほどお話を聞きしていても、3,000人くらいはたぶん、20年間で、お泊りになるかなあという。だから3,000の物語があるんですね。

飯田市副市長 佐藤 健 さん

皆さんこんにちは。佐藤健(たけし)といいます。今日は副市長という立場ではなくて、一人の、Uターンというか、久しぶりに飯田に帰ってきたプライベートな話、どんなことを感じているのかっていうお話をさせていただきたいと思えます。何枚か写真を用意しました。最初の写真は、今年出した年賀状ですが、5人の家族です。妻1人、子ども3人ということで、子どもが一番上から中3の女の子、小5の男の子、小1の男の子、とまあそういうことですが、おかげ様で仲良く暮らしております。次の写真。これ家の前のテラスのところで焼肉をしている写真ですが、たまたま両親の家の隣の土地が空いていたので、そこを買わせていただいて、4年前に家を建てました。両親と隣で住んでいるっていうことで、ここに両親も写ってますけども、親とすごく近くで暮らせるっていうのは、今感じている幸せの1つ、大きな要素かなあというふうに思っています。

今、僕は、趣味はなんですかって言われたら、子育てですって答えますけども、一番下の子が小学校1年生ですが、家にいる時間で一番長いのは多分この小1の彼と過ごしている時間が長いかなあと思えます。前に散りばめてある写真は、その小1の子といろいろやっている写真ですね。一緒に料理したりとか、今年から剣道を始めたのでその面倒を見たり。そういう家族との時間ってのは、今、飯田で暮らしている幸せの内の、かなりの

大きな要素を占めています。

これ、飯田市内ではなくて、阿南の和知野川の二瀬っていうキャンプ場になりますが、飯田の場合こういった自然と触れ合う機会というのは、もう思い立てばすぐ出来るっていうことで、それこそほんとに朝思い立ってキャンプに行って、翌朝撮った写真ですけれども、こういう極めて身近に、川、山があってそれと触れ合えるっていうのは、やっぱり飯田、信州で暮らす幸せの 1 つ大きな要素かなあというふうに思います。たぶん東京でキャンプをやろうと思ったら、相当前から準備をし、場所を予約し、天気を心配し、とまあそういうことになると思うんですけども、ここで暮らしていれば、朝思い立って今日天気良いから行くかっていう感じで行けるっていう。これは地元の人からすると当たり前ではありますが、こういった暮らし方っていうのは、プライスレス、値段が付けられない幸せの部分じゃないかなあというふうに思っています。

これ、子育て環境としても僕大好きですよっていう写真ですけども、うちの一番下の子が、実は、大きな声で言って良いのかわかりませんが、公立の保育園には行ってなくてすね。「自然保育のつばら」っていう看板出てますけれども、母親たちの自主保育サークルから法人化された、野外保育の保育園ていうか。そこでうちの子どもたち 2 人、男の子 2 人は育てているんですけど。右上の写真はですね、喬木村の富田っていうところにある「もなみ園」ていう、ビオトープっていうか、そんなところですね。そこで 1 日暮らして帰ってくるって、まあそういうことをやっていました。

子供をどこで育てるかって考えた時に、僕は飯田で育てることができてほんとに良かったなあと思っています。総務省っていう仕事柄、地方と霞ヶ関を行ったり来たりするっていうことで、最初の赴任地が秋田、次が鳥取で、鳥取にいる時に結婚をして、その後、一回東京に戻った後大分だったんですが、1 番上の子どもはその鳥取から大分に行く間の東京で生まれているんですけども、その子を育てながら、ここで、東京で子どもを育てていくというイメージがどうしても浮かばなかったので、一体どこで子どもを育てていくことになるんだろうなあって実は思っていたんですが。大分にいる時にちょうど声をかけていただいて、飯田市に赴任するっていうことになったので、これでようやく自分の子育ての場を、飯田を拠点にして子どもを育てることができるっていうことで、これはほんとに僕にとってラッキーだったなあというふうに思います。

説明してない写真が一枚ありました。左上の写真は、この保育園の醤油を仕込むとかいう体験をやらせてもらえて、醤油樽をかき回している写真ですね。いろんな意味で、長野県でしか出来ない体験をして、子どもが育てているなあと思います。左下の写真はですね、豊丘村の田んぼの一角を借りてお米を育てたりしています。この写真を年賀状で送った後に、ついに農業にいきましたかっていうそういう反応をしてくれた人もいましたけど、農ある暮らしといいですか、ちょっと農業をやってみたいとか体験してみたいっていう時に、気軽にいろんなことが体験できるのがこの地域の良いところかなあというふうに思っています。

太陽光発電も含めて、自然エネルギーの力を借りて暮らすっていうのは、すごいライフスタイルとしては、古くて新しいというか。それをやってみたいという人はたぶん世の中にたくさんいて、僕らだけじゃなくて、この地域の中にはそういう方々がいっぱいいると思うんですけども、それも信州ならではの幸せな暮らしなのかなっていうふうに思います。

写真としては最後ですが、この地域で子どもを育てている、あるいは自分として暮らしていく中で、幸せだなあと思うことのひとつが、こういう地域での活動ですね。獅子舞をやらせてもらったり、お神輿があったり。左下は、節分の時に、鬼になっていろんな家を回ったり、ということですし、そういった地域の人たちと、文化って言ってしまえば文化って言葉で片付けちゃうかもしれないですが、こういう色んな活動をしながら、地域の人たちと一緒に暮らしていくっていう。これもすごく幸せなところで、先ほど地域人教育の話がありましたけれども、子どもたちも地域の人たちに育てられてる部分っていうのがすごくあるなっていうふうに思います。

子どもたち皆、子どもの獅子舞とか、そういったものをやらせてもらってますけれども、例えばうちの長男、真ん中の子なんかは、獅子舞で太鼓を叩かせてもらってますが、周りの大人たちに太鼓がすごい上手だ上手だって褒めてもらって、嬉しくなっちゃって太鼓を一生懸命やるんですね。それがやっぱり彼の育ちにはすごく良い影響があるんだろうというふうに思いますし。上のお姉ちゃんも、もう中学校 3 年生で卒業、まあ地域から見れば子ども獅子卒業の歳になってますけれども、高校生になってもやりそうな雰囲気があり、それを親が言わなくてもそういうふうにやりたいと思ってるってことは、その地域の中でそういった活動は子どもなりにしっくりきてて、幸せを感じながら生きてるんだろうなっていうふうに思います。こういう地域との関わりがあって生きている。それが、この地域で暮らす幸せとしては凄く大きいのかなということ。初めて明かすプライベートの数々ですが、今日は一人の飯田で暮らす人として話させていただいています。ありがとうございました。

長野県文化財・生涯学習課企画幹 木下 巨一

自分が飯田に暮らしたり飯田の中で活動をしている中で、大事にしていることとか、もうお話の中でも出てきたんだけど、飯田って自分にとってどういうところがあるんだろうというような話をちょっと話していただきたいです。もう一つ、他の方の話を聞いていて、ああ、そうだよなって思ったことも含めて、もう一回、殿倉さんからお願いしたいと思います。

株式会社太陽農業 殿倉 由起子 さん

私がすごく大事にしていることは、まず仲間かなと思います。私がやってる活動って、実は一人で出来ていることってひとつもなくて。野菜ソムリエの活動だったりとか、農

業女子の仲間だったりとか、PAL ネットながのの仲間だったりとか、シードルの仲間だったりとか。ほんとに皆と出会えたことっていうのが、ほんとにすごくかけがえのない、自分の活動につながっていると思います。私、一番初めに就農しようと思ったことが、今就農する前に一回あって。祖父が一人でりんご出来ないから手伝ってくれないってことで帰ってきたんですけども、周りに同世代で農業やってる人が一人もいなくて。私、下久堅なんですけど下久堅ってほんとに中山間地だと思うんですけど、農業やってる人はいるんですけど皆兼業なんですよね。専業農家の家は全然なかったの、昔から農家って言うのがすごく恥ずかしかったっていうか、ほんとに田舎っていうこともあって仲間がいなかった。思いを共有できる人がいなかったというのと、おじいちゃんとただ単に合わなかった、昔気質で合わなかったっていうのはあったんですけど、もう半年でやめちゃったんですよね。それでまた東京に帰って、それからまた2年半位してから帰って来たんですけども。地元の農業青年クラブ、そこに入ったことで同世代で農業を自分の仕事として、産業として、自分の家業として、頑張ってる仲間がいるんだっていうのに気付かされたっていうのがほんとに初めて農業頑張ろうと思ったきっかけでもあります。それが PAL ネットながのの仲間なんですけれども。それから県で活動することによって、さらに大きなスケールで農業をやってる人たちがいたりとか、ほんとにニッチなところを攻めている人だとか、ほんとに個性的な仲間がいたっていうのは、すごく良かったなと思います。

飯田にUターンしてきて気付いたことっていうのはやっぱり、一番は自然の豊かさ。田代くんのお話の中にもあったんですけど、18年間、高校卒業まで飯田で過ごしていたけど、ほんとに丘の上のこととか全く知らなかったし、まず自分が住んでる場所のことっていうのがほんとにわかんなかったなって思います。これうちの畑からの写真なんですけれども、ちょうど目の前に風越山が見えるんですよね。その環境ってのが当たり前すぎて、全く気付かなかった。それに気付いたってのも実はイギリスに行った時で、イギリスで、電車で移動することがよくあったんですけども、イギリスもすごく田舎が、田園地帯が広がっている場所なんですけれども、すごく不思議なんですよね。日本と全然同じじゃない、何か違和感を感じる、それ何だろうって思った時に、イギリスの田舎っていうのはすごく草原が広がっていて、木が時々生えていて、牛とか羊がいる、それが延々続いている感じなんですよね。でも山が全くないんです、同じ田舎でも。でもこの飯田っていうのは、まず、私が住んでいるこっち側からだと、向こう側のまず風越山が見える。その向こう側に、中央アルプスがちょこっと見えるっていうのが当たり前すぎて、それが何か落ち着く、自分の心を落ち着かせている芸術だったなっていうのに気付かなかった。帰って来て、やっぱり目の前にある風越山がすごくきれいで、ほんと朝とか畑に行った時に、ああすごいきれいだなって思って、思わず写真を撮ってしまうってことが私はよくあるんですよね。今までそんなことなかったのに。やっぱそこに気付いた、気付かさせていただいたってのはすごい良かったなって。それはやっぱりUターンしてきたからこそだったのかなあと思うんですよね。

今、すごく思っているのは、この場所にゲストハウスつくって、あとカフェつくりたいなって。もともと私、ずっとカフェつくりたいって思いがあったんですよね。10年前に始めて、こっちに帰って来ようかなって思った時に、農業はすごい嫌だったんですけど、ちょうど同じタイミングで地元の高校の時の友達とか、ちょうどUターンして帰ってきた年だったので、実はここにちょっと影があるんですけど、この先にログハウスがあって、そこでほんとに毎週のように、週末になると、皆で集まってお酒飲んでパーティーしてたんですよ。その環境ってすごい、そこだからできる飯田だからできるっていう場所で。ここに、私が東京の時に働いていた時の同僚の人たちが遊びに来ていただいたりとかあって。で、後で来てくれた時に、やっぱり山の景色の良さってのがすごい褒めてくれたりとかして、やっぱりほんとに自分のいる環境って良いところなんだな。ここでほんとに皆が集まれるようなパーティーできるような家族ができたらずごく良いなってずっと思い描いているので、太田さんの話とかを聞いて、あ、これからインバウンド、狙えるなって。そういうことも、ビジネスになっていけば、すごく良いなあって、今思ってます。

長野県松川高等学校3学年 田代 直己 さん

自分も今まで色々こういう活動とかもさせてもらったんですけど、これも結構、偶然であったりとか、たまたま色んな人との出会いが重なって、こういうような活動ができたなっていうふうに思っています。

太田さんの話じゃないんですけど、私もあまり小中学校の時は、ある時にはちょっとあんまりこう学校に行っていないとか、元気じゃない時があったんですけど、高校に行ってから、松川ってすごく、飯田の、それこそ下久堅の方とかとも似ていて、りんご農家さんが多かったりですとか、すごく山がきれいなところで。そこで過ごした期間でいうのも、凄く自分の中で癒しになったような感じがして。太田さんが言っていた、健康な子ってどこでも暮らしていけるってような話じゃないですけども、そこにいることによって、力を蓄えることができたなっていうふうにも感じますし、また、蓄えた力を飯田市とかで自分がやりたいことを周りの人に応援してもらって、色々出来た高校3年間だったなっていうふうに思います。

これからのことなんですけれども、今まで自分は色々やってきて、高校生が色々な発案して、色々な企画をやるのは凄く良いよねってような雰囲気がいっぱいありながら、高校生がやってるっていうようなことが、ここに結構周りに行政の人がいっぱいいる中で言うのもあれなんですけどあったりして。高校生発案っていうことに凄く重点を置かれている中で高校生活を過ごしたんですが、これから自分としては、地域でこういうことしたいんだけどどうかなっていうのを、じゃあやりましょうっていうような形で応援できるような人間にこれからなっていきたいなっていうような形で、就職だったりも探していきたいなと思っているような形でいます。

飯田 OIDE 長姫高等学校教諭 国松 秋穂 さん

学校の先生の役割ってほんとに色々多岐にわたって増えてきているんですけど、地域に出るっていう時の、学校の先生、これ小学校も中学校もそうかなあと思いながら、何かこんなふうにやればいいのかあと思ってるのがいつもあります。それが大事にしていることなんですけれども。僕は少年少女の心というのをいつも持ちたいと思って、持っているのかなあと思いながら。で、それを持つことが地域に出ていく先生にとっては凄くやりやすくなるのかなと。もっというと先生として出ちゃうと、あんまり良くないなっていうふうに思っていて。具体的に言うと、僕も楽しそうだし、僕もそれやりたいんだよっていうようなことを見つけに行くようなことをして、わりかし土曜日とか、日曜日とか出ること多いんですけども、結構それ好きで、今は、出ていて。先生プライベートと仕事と分けるの大変じゃないですかっていうことを言われて、自分もちょっと深く考えたことはあるんですけど、日常的にあんまり考えていなくて、ワークライフバランスですとか、働き方改革っていう今取り組んでいらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが。東京で、社会課題に対して企業を応援する会社の阿部さんっていう社長がよく言うんですけど、幸せはワークライフミックスだって言う。バランスじゃなくてミックスって。まさに公私混同なんですけれども。自分がそういう意味で、少年の心とか、乙女の心も持っていたりするときもありますけど、そういった時に、地域に出ていく時に、大事にしていることは単純で、一緒にいること。高校生と一緒にいて、その地域の方とのお話をするときにも、なんとか仲良くなろうかなあとか、それぐらいのことを大事にしながら、高校生は、自分で学んでいく姿を凄く目の当たりにしています。

太田農園経営 太田 いく子 さん

我が家のことちょっと振り返ってみますとですね、息子たち 2 人おりましたが、県外の大学を出て、それぞれ県外で就職し嫁をもらっておりましたところ、ある日突然、長男坊が、うち買いたいんだよっていきなり言ってきたんだ。ほんと私ね、早く帰って来いよってもう言いたくてなるでおったのに、やつが言ってきたもんでな、これはしめたもんだと思っておりまして、10 年ほど経ちます。私がですね、そもそも千代を何とかしなきゃいけない、人口の減少をくい止めなきゃいけないっていう思いで始めた交流事業でしたけれども、色々言っちゃった手前、「いくちゃんちはどうよ」って聞かれた時に、おかげ様で長男坊帰って来ましたなんて大きな声で言えるようになりました。じいちゃんばあちゃんと私たち夫婦 4 人で暮らしていましたが、突然、7 人家族、大所帯になってしまいました。現在は、今、じいちゃんが亡くなってしまったもんですから、4 世代 7 人で頑張っております。交流人口をうまく続ける秘訣はですね、やはり家族の中が円満であること。ましてや夫婦、それから嫁姑、こんないざこざがないような、そういう所でないと来てくださった方が気持ちよく過ごしていけないなというふうに思っております。まあ 1 日ばかり夫婦喧嘩、頑張っつてよそうぜつていうようなそんな感じですけども、これから先ですね、やっぱり、

もっともっと、私自身も今更と思うんですけれども、磨きをかけていかにやいかなあという思いもしてますし、もっともっと大勢の方と出会って、楽しく暮らしていきたいなあというふうに思っています。

飯田市副市長 佐藤 健 さん

さっき、殿倉さんのね、風越山の写真があったじゃないですか。僕あの家建てる時に、食卓に座って、風越山が見えるようにしようって言ってそっち側に窓開けたんですよ。それにすごいこだわって、設計頼んだんですけど。子どもたちは、なんでお父さんお母さんはあそこの窓はどうしても作ってくれってそんなことって言ってましたが、やっぱり、僕らにとっての風越山ってね、そういう存在なのかなって思うし。うちの妻もおかげさまで風越山のことは気に入ってくれていて、この山の存在ってすごい大きくなって思います。あれはいくつの時だったか、東京から帰ってくる高速バスに乗りながら、それは風越山ではなくて、どのあたりを通ってる時かなあ、松川町のあたりかな。南アルプスの緑の山を見て泣きそうになったことがありました。この山に包まれている、この雰囲気この飯田・下伊那ってそういう包み込む優しさがあって。それは我々がいつも中にずーっといると気が付かないけど、外に行って帰ってくると凄く感じるっていう気がします。実は飯田に戻って1年位前ですかねえ、うちの家族は大分の時がすごく幸せだったので、大分は良かったなあ、大分は良かったなあって1年位ずっと言ってたんです。僕としては凄く切ない時間が1年位あったんですが、そのうちやっぱり飯田の、たぶん人間関係だと思うんですけども、そういう地域の人たちと獅子舞やなんかに関わったりとか、妻にすれば学校を通じて色んな人間関係ができたとか、そういった中でここで暮らすことの良さっていうのがだんだんわかってきて、大分良かったなってことは言わなくなったし、何よりも、もうこれで転校しなくて良いいってうか、このままここに住むっていうことが彼らの中にだんだん入って行って、ここで暮らすことについてのなんていうか、自分の中での心がだんだんできてきて、それで今、凄く幸せに家族としては暮らせているのかなっていうそんな気がします。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

今日ちょっと色々お聞きをされていてすごく、まあある種僕は羨ましいなあと思いながらお聞きをしていました。帰るべき場所があるっていう人の言葉って、なんか強いなあというふうに思って今聞いて。僕自身はずっと東京生まれの東京育ちで、親が田舎から出てきたもの同士が結婚してということで。どちらかというとも東京にもそんなにアイデンティティがなくて、故郷っていう感覚があんまりない人間なんです。逆に言うと、故郷が欲しくて地域づくりとか町づくりとか人づくりみたいなのところに、自分の仕事の後半がフォーカスしてるのかなあなんて、今聞きながら改めて自分のことを振り返りながらちょっといきました。

先ほど佐藤さんからのお話で、大分が良かったなあっていう記憶の話と、でも、人とのつながりの中でその時の感覚よりも今の方の豊かさを凄く感じる、たぶん両方良い幸せな風景なんだろうと思うんですが。殿倉さんが仲間だっということをおっしゃってたりとかいうお話。いくちゃんはどこかという受け入れる側とかね、人に影響を与える側とか、スイッチをお客に入れる側なのかなというふうに思うんですけど。そういうふうに人とのつながりが凄く豊かなところなんだというのが、なんとなく僕の飯田に対するイメージで。まあ南信というふうに言っても良いのかもしれないんですけど。逆に言うとそういう地域で生まれ育ったということが羨ましいなあって素直に今日思っていました。でも実は今日このメンバーは、たぶん図らずも、一回外の風を経験したりとかして、当時いた時には気付かなかっただけというのがたぶんあったのかなあなんてことをお聞きして感じました。フロアにいる皆さんでずっと飯田ですみたいな方がいらっしたり、逆に言うと、いや何を言ってるんだと、それは当たり前毎日の毎日、自分たちの日常じゃないかってきつと思うことなんじゃないのというふうに思うんですけど。でもそれが実は誰かにとってみたり、ないしは外との経験を持つてることによって相対化する経験を持つてると実は気付けることだったりするってことにも一つ気付けるんじゃないだろうかとというふうにちょっと感じます。

そのギャップだったり、差異みたいなものが、いくちゃん、収入引く経費は感動だっておっしゃってましたけど、感動の「感」っていう言葉だったりとか、あと殿倉さんか田代さんかにあったと思うんですけど、「感じる」っていう言葉。「感」という字ですよ。すごく重要なんじゃないかなあというふうに感じました。国松先生がされてる地域人教育のような形で、高校生だったり学生さんたちが、何を感じるのか。その感じることをどう準備できるか。大人の方はそのことを、感じる感じろって意識をさせる必要なことではないんだろうけれども、気付いたら心のスイッチが入るみたいな体験を、どんな風に地域の方でさせてあげられているんだろうかっていうことが、凄くこう、アイデンティティの根っこかなあなんてことをちょっと聞きながら思いました。その力みたいなものが、たぶん飯田の中の底流にある、公民館の活動であったり学びの力だったりというようなことに、こう根ざしているのかなあというようなことをちょっと感じながらお聞きをしていたという、今日の私の感想のような話です。

それで、実は僕が一つ聞いてみたいのと、5人の方に聞いてみたいので。一言で、後ほどまたブランディング・フォーラムのまとめをしますけれども、よく聞くのは、自分の町で信じているものは何ですかってことを聞くんですね。皆さんにとって、飯田になるのかはわからない、下久堅だとかもうちょっと小さくても良いんですけど、自分のその今、大切にしているもの、ないしは飯田という町に対して、あなたは何を信じてますかって聞かれたら、何て答えますかっていう。一言ではなく、何かもやもやでもいいんですけども。

株式会社太陽農業 殿倉 由起子 さん

よく言う言葉なんですけど、やっぱり「結」っていう言葉が、飯田の語源で、「YUISAI」とかにも使わせてもらったんですけど、やっぱりすごい良い言葉だなあと。で、飯田の語源ていうのが「結い田」ってあって、田んぼを結うって書いて、いうんですけど。それを知ったのも私、ほんとに最近のことで、今度 YUISAI を作ろうって言った時に、じゃあどんな言葉使える？って時に「結」っていうのが出てきて、ああこれ結って、ほんとに飯田の語源でもあるし、しかも由起子の「ゆ」っていうのと、相方の、いずみさんの「い」の「ゆい」って、すごい良いじゃんって。一番は結ってということは人とのつながりってのはすごい深いなと思って、飯田ってほんとに狭いんですよ。何か私、飯田の町とか行くとほんとに知り合いばかり会っちゃって、ここでなんにも悪いことできないなあっていつも思うんですけど、してないんですけど。その方々がいるからこそ、ほんとに自分がここに楽しく暮らせていけていて、このような活動をさせていただいているってのは、ほんとに周りの人につながりがあったなっていう。やっぱり「結」ってのは大切だなんて思ってます。

長野県松川高等学校3学年 田代 直己 さん

私の場合は、大人っていうことで。この大人っていうのが、特に、学生だと、一番近くにいる大人っていうと先生か親っていうことになるんですけど、そうじゃなくて、そういう逆に先生や両親以外の大人の人と関わったことが自分の中では色んな経験をするきっかけになったし、それをしたことによって地域の大人の人と関わる、学校外の大人の人と関わるっていうことが多くて、色んな経験をさせてもらえたなあとと思うので、自分もこれからそういう大人になっていけたらいいなっていうふうに思います。

飯田 OIDE 長姫高等学校教諭 国松 秋穂 さん

田代くんと同じようなことになりすけれども、やっぱり飯田の町そのものを私は信じていきたいなと思っています。そこで二つ大きくあるかなと思っているのは、人と自然。高校は、教育を司るっていう立場もそうですけど、自分としてもこの人と自然というものはぜひ信じた上で生きていきたいなと思っています。

太田農園経営 太田 いく子 さん

私の場合はやっぱり人と自分って言いたいと思います。自分を、可能性を信じて、これからは頑張っていきたいなあとというふうに思っています。

飯田市副市長 佐藤 健 さん

皆さんと結果的には同じことで、僕は人の力を信じています。この地域の何事もたぶんこの人たちでしたらできるだろうと思っています。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

はい、ありがとうございます。あの、第三者になりますけど木下さん。飯田の何を信じられていますか。

長野県文化財・生涯学習課企画幹 木下 巨一

いやあ、なんかほんとにあの、一人ひとりのなんかこう前向きな生き方、そういう人たちとの出会いなんですけど、やっぱりそういう前向きな生き方っていうところかなあ。

長野県参与（信州総合ブランディング担当） 船木 成記

はい、ありがとうございました。素晴らしいコメントと、言葉をいただいたなあと思いながらお聞きをしていました。実はブランディングというのは、そんな難しいお話ではなくてですね、人は物語を生きる動物だって言葉があります。要はどんな、自分の人生、生き方をしているんだろうというお話なんかもあったかなあと思うんですけど。今日、田代くんがおっしゃったことが一つ近いかなあと思うんですけど、何しろ自分の将来に向けての一言があったかなあというふうに思います。今まで高校生だということで、発案したことをいいねえっていうふうに言って表に出してくれた人たちがいた、大人がいたと。信じるべき大人がいてくれたと。自分はこの後今後、そういう経験を逆に言うとしていく側になりたいんだというふうに彼はおっしゃってくれました。まさにそれは物語なんだろうというふうに思います。きっと彼のこれからの人生の選択というか、どういうことになるかわからないけど、一つひとつの選択の中にそういう物語があるが故にこそ、困ったり迷ったり悩んだときにはひとつ、それを軸にたぶん考えるんだろうと思うんですね。そんなことっていうのは、それぞれ皆さんの中で何らかの人生の選択をする、ないしは明日どうしようという、一つの迷いをこう断ち切る、アクションする。恐らく何らか一つの意味づけであったり、理由であったりがあると思います。それが物語なんだというふうに思うんですね。

今日は一人ひとりの大切する物語が色々ありました。「結」の言葉だったり、自分の可能性を信じるといういくちゃんのお話とか。自分の力を信じなかったら他人を支えることはできないって話なんだろうなあっていうふうに思ってお聞きをしていましたけれども、実はそういうような一人ひとりの物語が集まっているのが、飯田という町の一つのアイデンティティなんだと。その東が飯田という町のアイデンティティであり、ブランディングなんだと思うんですね。僕の仕事は、何しろ長野県の立場のお仕事で言えば、長野県全体の物語という一つの東にしたいんですけども、最初から長野県の東があるわけじゃないんですよ。どっか外の上の方に長野県の東がある、ストーリーがあるわけではない。皆さんの日常の一つひとつの物語の束の集合体でしかないんですよ。県でいうと今 220 万人位ですかね。220 万人の人の物語の束が、実はブランディングっていうようなことになるんですね。どっか外にあって誰かが作ってくれるものではなくて、皆さんが織り成す、一つひ

とつの物語をどうやって束ねるというか共通項を見出して、一緒に信じれるものが見つかるかということなんですね。なので、信じるものは何ですかって、今日は飯田の皆さんで出会った人たちにお聞きをしました。キャッチコピーが一つパンって見つかるような話ではなくて、自分たちが信じる町、自分たちが信じる地域、ないしは未来みたいなものを、いかに共有できるか。そのことに胸を張って次のステップに行けるか、ないしは今後、出会うであろう未来の仲間と一緒にになって共有できるか。そんなようなことをですね、一緒になってデザインできていけるなら、長野県のこれから、ないしは飯田のこれからは、より豊かなものになっていくんじゃないかなあなんてことをちょっとお聞きしました。その意味で今日、僕は、飯田の魅力を皆さんに教えていただけたらうれしいなというふうに思ってこの場にいさせていただいたんですけれども、先ほどおっしゃっていただいたように、すごく前向きな気持ちを持たせていただいているこの時間を終えることができたなあというふうに思っていて、改めて心から感謝を申し上げますね、この土曜日のこの昼間にお集まりをいただいた皆さんと共に、良き時間だったなと感謝をしたいというふうに思って、一応まとめの言葉というふうにさせていただきます。